日本語心理動詞の性質について

――受身・使役の考察から――

外崎淑子

1．はじめに

日本語の心理動詞は時間的展開性のある非状態動詞（non-stative verb）であり，かつ，動作主（Agent）を取らない非動作主性動詞（non-agentive verb）である[1)]。アスペクト分類上，工藤（1995）が心理動詞（感情動詞）を「内的情態動詞」の一部として，状態動詞（静態動詞）とも運動動詞（外的事象動詞）とも区別したように，日本語の心理動詞はそのアスペクト的性質に特徴があり，さらに，通常の運動動詞とは異なる統語的振る舞いをすることが広く知られている[2)]。ただし，どの動詞を心理動詞に分類するかという分類の基準は曖昧であり，おおむね，感情・知覚感覚・思考など心理作用を表す動詞が心理動詞であると考えられているが（吉永　1997），どの動詞を心理動詞と認めるかによって，当然，心理動詞の体系的特徴も異なってくる。本稿では，動詞の意味役割が統語構造にどのように反映するかという観点からデータを考察するため，工藤（1995）が「内的情態動詞」として挙げた「思考動詞（思う，祈る等）」「感情動詞（苦しむ，驚く等）」「知覚動詞（感じる，見える等）」「感覚動詞（痛む，疲れる等）」のうち，意味役割として「経験者（Experiencer）」「感情が向けられる対象（Target）」「感情を引き起こす誘因（Causer）」をとりうる「感情動詞」のみを心理動詞として扱う。

本稿では，日本語の心理動詞を，①補語の格表示が「を」か「に」か，②受身文となるか，③-(s)ase 形態素を付けることでいわゆる EO 心理動詞（Experiencer-Object 心理動詞）となるか，④項を増やす通常の使役文となるか，⑤補語の意味役割と格表示の関係，といった観点から考察し，さらに，⑥有生補語をとりうるか，⑦補語の省略が可能か，といった点も合わせて，心理動詞がどのような性質を持つのか明らかにしたい。

2．心理動詞と受身文

杉岡（1992）は，日本語の心理動詞には大きく分けて（1）のように与格補語（「に」目的語）をとるものと，（2）のように対格補語（「を」目的語）をとるものがあり，(3)-(5）のように両方のパタンをとる動詞もあるとしている。

(1)［Aが　Bに　動詞］
　太郎が試験の結果に失望した。
　花子がニュースにおどろいた。
　子どもが大きな音におびえた。
　学生が先生の話に感動した。
　殺人犯が罪悪感に苦しんでいる。
(2)［Aが　Bを　動詞］
　太郎がテニスを楽しんだ。
　花子が失敗を恐れる。
　先生が学生の非行を心配する。
(3) a. 花子が合格の知らせに喜んだ。
　b. 花子が志望校合格を喜んだ。
(4) a. 村人が牧師の死の知らせに悲しんだ。
　b. 村人が牧師の死を悲しんだ。
(5) a. 企業が経営の悪化に悩んでいる。
　b. 学生が成績が悪いことを悩んでいる。

（杉岡1992, 365）

杉岡（1992）は，心理動詞の項構造について意味役割から考察し，与格構文も対格構文も，主語はどちらも「経験者（Experiencer NP）」であるが，与格補語は，ある感情を引き起こす原因となる対象（寺村（1982）の用語では「誘因」）を表し，対格補語はある感情が向けられる対象を表すとしている。それぞれ，Pesetsky（1995）の言う，Causer と Target [3] である。そして，与格構文に現れる経験者は外項ではないが，対格構文に現れる経験者は外項であり，ゆえに，対格構文の心理動詞のみが受身構文になるとしている[4]。(6a-d) は対格構文の心理動詞の受身文で許容されるが，(7b) (8b) は与格構文の心理動詞の受身文で非文である。

(6) a. 山田先生は学生達に / から　恐れられている。
　b. そのプレゼントはみんなに / から　喜ばれた。
　c. 花子は子供達に / から　好かれている。
　d. 彼の突然の死は多くの人々に / から　惜しまれた。
(7) a. 若者はロックの大音響に興奮した。
　b. *ロックの大音響は若者に興奮された。
(8) a. 学生は彼の罵声におびえた。
　b. *彼の罵声が学生達におびえられた。

（杉岡1992, 371）

杉岡（1992）の観察は基本的に正しい。しかし，実際にデータを見ていくと，(9)-(11) の

ように，対格構文でありながら受身文が不可能なもの，(12)(13) のように，与格構文でありながら受身文が可能なもの，また，与格構文・対格構文の両方をとるもので，(14)(15) のように，受身文とならないものが存在する。与格構文・対格構文の両方をとるものは，(16)(17) のように，対格構文から受身文が作れるはずである。

(9) a. 太郎が軽率な行動を後悔した。
b. *軽率な行動は太郎に後悔された。
(10) a. 太郎が軽率な行動を反省した。
b. *軽率な行動が太郎に反省された。
(11) a. 太郎が出世をあきらめた。
b. *出世が太郎にあきらめられた。
(12) a. 太郎が花子の言動にあきれた。
b. 花子の言動が太郎に / から　あきれられた。
(13) a. 関係者が田中博士の受賞に驚いた。
b. 田中博士の受賞が関係者に / から　驚かれた。
(14) a. 太郎が成績が悪いことを / に　悩んだ。
b. *成績が悪いことが太郎に悩まれた。
(15) a. 太郎が進路選択を / に　迷った。
b. *進路選択が太郎に迷われた。
(16) a. 太郎がその知らせを / に　喜んだ。
b. その知らせが太郎に喜ばれた。
(17) a. みんながその男の訃報を / に　悲しんだ。
b. その男の訃報がみんなに悲しまれた。

(9) から (17) に挙げた心理動詞は，工藤 (1995) が「感情動詞」の例として挙げた動詞の一部である。ここで，心理動詞の受身文の振る舞いから例外となりそうな，これら「後悔する」「反省する」「あきらめる」「あきれる」「驚く」「悩む」「迷う」について考察する。これらの動詞の振る舞いを見るために，次の節で，形態素 -(s)ase が付いた EO 心理動詞構文 (Experiencer-Object 心理動詞構文) について観察する。

3．EO 心理動詞構文と使役構文

日本語の心理動詞は，表層上，経験者 (Experiencer) が主語である ES 心理動詞 (Experiencer-Subject 心理動詞) であるが，この動詞に使役形態素の -(s)ase をつけることで，経験者が目的語となる EO 心理動詞構文 (Experiencer-Object 心理動詞構文) を作ることができる。(18a)(19a) が ES 心理動詞構文，(18b)(19b) が EO 心理動詞構文である。

（18）a. 太郎がその事故を悲しんだ。
　　b. その事故が太郎を悲しませた。
（19）a. 太郎がその知らせに安心した。
　　b. その知らせが太郎を安心させた。

通常の運動動詞の使役文は，動詞に使役の形態素 -(s)ase が付いた場合，元々の能動文から項が 1 つ増える。

（20）a. 学生が廊下に立つ。
　　b. 先生が学生を廊下に立たせた。
（21）a. 学生がレポートを書く。
　　b. 先生が学生にレポートを書かせた。

しかし，EO 心理動詞構文の場合，（18）（19）に見るように，ES 心理動詞構文から項が増えることはなく，経験者が目的語へと降格し，感情の対象，誘因が主語へと昇格する。

Fujimaki（1998）は，対格構文の ES 心理動詞の中には，（22b）（23b）のように，使役構文に組み込んだ際，項を増やせるものがあることを観察している。しかし，そういった動詞でさえ，筆者の観察によると，（22c）（23c）のように，使役文の主語を有生名詞とし，動作主性を持たせると，許容されにくくなることがわかる。例えば（22c）が許容される状況は，太郎が心からお化けを怖がっている場合ではなく，花子が太郎に演技でそのように見せろと命じた場合などであり，不自然である。

（22）a. 太郎がおばけを怖がった。
　　b. その話が太郎におばけを怖がらせた。
　　c. *花子が太郎におばけを怖がらせた。
（23）a. 太郎が花子の死を悲しんだ。
　　b. その知らせが太郎に花子の死を悲しませた。
　　c. ??次郎が太郎に花子の死を悲しませた。

このように，日本語の典型的な ES 心理動詞は，使役文の主語を有生名詞とした場合，項を増やす使役文にはなりにくいことが観察できる。これは，使役構文とは，使役主語の動作主が補文の主語に働きかけて，何らかの動的行為を自ら起こさせるものが基本であることから明らかである。日本語の心理動詞は，1 節にも述べたように，動作主性（agentivity）の低い非動作主性動詞（non-agentive verb）である。心理動詞が使役構文に入らないのは，自然なことである。

Arad（1999）は，心理動詞には動作主性の高いものと低いものがあり，動作主性の高いものは，心理動詞特有の特殊な振る舞いをせず，通常の動的動詞と同じような振る舞いをすると観

察している[5]。では，日本語ではどうだろうか。ここで，前の節で杉岡（1992）の例外となりそうなES心理動詞の「後悔する」「反省する」「あきらめる」「あきれる」「驚く」「悩む」「迷う」について考察し直す。

まずは，対格構文でありながら，受身文とならない「後悔する」「反省する」「あきらめる」と，対格構文・与格構文のどちらにもなりうるが受身文とならない「悩む」「迷う」について，有生主語の項の増える使役文（動作主性の高い使役文）となるか，観察する。もし，これらの動詞が有生主語の項の増える使役文となるならば，従来統語構造の研究対象とされてきた動作主性の低い心理動詞とは異なり，動作主性の高いものと言えるだろう。以下にその例を挙げる。

(24) a. 太郎が軽率な行動を後悔した。
　　b. 花子が太郎に軽率な行動を後悔させた。
(25) a. 太郎がその失敗を反省した。
　　b. 花子が太郎にその失敗を反省させた。
(26) a. 太郎が出世をあきらめた。
　　b. 花子が太郎に出世をあきらめさせた。
(27) a. 太郎が成績が悪いことを悩んだ。
　　b. *花子が太郎に成績が悪いことを悩ませた。
(28) a. 太郎が進路選択を迷った。
　　b. 花子が太郎に進路選択を迷わせた。

「悩む」を除いて，有生主語の項の増える使役文の補文となりうる。この点で，「後悔する」「反省する」「あきらめる」「迷う」は，動作主性の低い典型的な心理動詞とは異なると言える。

また，「あきらめる」「迷う」については，そもそも，EO心理動詞にもなりえない。

(29) a. 太郎が出世をあきらめた。
　　b. *出世が太郎をあきらめさせた。
(30) a. 太郎が進路選択を / に　迷った。
　　b. *進路選択が太郎を迷わせた。

工藤（1995）は，アスペクトの性質より，「あきらめる」「迷う」を「感情動詞」として分類している。確かに，動作動詞にも状態動詞にも属さない，人の内的事象である。ではあるが，統語的には従来研究対象とされてきた心理動詞の範疇から両者は外れるようである。しかしながら，もし，この２つの動詞を心理動詞ではないと分類したとしても，なぜ，対格構文から受身文が作れないか，という問題は残る。外項を持たない動詞を受身化することはできないため，「あきらめる」「迷う」は，何らかの意味的制約から外項を持たない可能性が考えられる。

さて，与格構文の心理動詞は，使役文のテストが難しい。そもそも，心理動詞でなくとも，与格構文は，使役構文に入りにくい性質があるためである。日本語では「～を～を」の許容度が低いことが知られているが，「～に～に」の連続も，(31b)(32b) に見るように，許容度が低い。(31c)(32c) のように，補文の主語を「を」とすることで許容度が上がるケースがある。

(31) a. 太郎が花子に会う。
b.??次郎が太郎に花子に会わせた。
c. 次郎が太郎を花子に会わせた。
(32) a. 太郎が弁護士に相続について相談する。
b. ?次郎が太郎に弁護士に相続について相談させた。
c. 次郎が太郎を弁護士に相続について相談させた。

与格構文でありながら受身文となる「あきれる」「驚く」について，有生主語の項の増える使役文の補文となるかを観察する。

(33) a. 太郎が学生の言動にあきれた。
b. *花子が太郎に学生の言動にあきれさせた。
c. *花子が太郎を学生の言動にあきれさせた。
d.??花子が太郎に学生の言動をあきれさせた。
(34) a. 太郎がその話に驚いた。
b. *花子が太郎にその話に驚かせた。
c. *花子が太郎をその話に驚かせた。
d.??花子が太郎にその話を驚かせた。

「あきれる」「驚く」ともに，有生主語の項の増える使役文では文法文とは言えず，どれも許容度が落ちるが，注目すべきは，(b) の「～に～に」と (c) の「～を～に」よりも，(d) の「～に～を」のほうが許容度がやや高いという点である。これは，「あきれる」「驚く」が，与格構文をとる心理動詞ではあるが，不完全ながら，対格構文もとり得るためではないか。

(35) a. 太郎が学生の言動にあきれた。
b. ?太郎が学生の言動をあきれた。
(36) a. 太郎が花子の出世に驚いた。
b. ?太郎が花子の出世を驚いた。

そうであるならば，「あきれる」「おどろく」が受身文となることに問題はなくなる。また，山川 (2004) は，与格補語に関し，意味役割は 1 種類ではなく，「誘因」と「感情の対象」の

どちらにもなりえ，心理動詞にとっては「感情の対象」のほうが，より必須な要素であるとしている。(35)(36) ともに，「学生の言動」「花子の出世」は，誘因というよりも，感情の対象として解釈されやすいように思う。「感情の対象」を持つ動詞の項構造が外項を持つならば，これらが受身文となるのは，納得できるのではないか。また，両者は，EO 心理動詞構文ともなり，また，(33)(34) で見たように有生主語の項の増える使役文でも許容度が落ちることから，典型的な心理動詞と言えるだろう。

残るは「悩む」である。EO 心理動詞構文となる，有生主語を持つ項の増える使役文とならない，という典型的な心理動詞であるのに，対格構文から受身文が作れない。次節では，心理動詞の意味役割から，この「悩む」の性質について考察する。

4．心理動詞の意味役割と使役受身文

1 節で述べたように，心理動詞の対格補語は，基本的にはある感情が向けられる「感情の対象」を，与格補語は，ある感情を引き起こす「誘因」を表す。杉岡（1992）は，そのため，「知らせ」のように，直接の対象ではなくそれを伝えるものが対格補語となるとやや不自然な文となり，逆に感情の対象の内容を表すものは，対格補語のほうが自然で，与格補語は不自然となるとしている。

(37) a. 花子はその知らせに喜んだ。
　　b.(?)花子はその知らせを喜んだ。
(38) a.(?)花子は父親の無事に喜んだ。
　　b. 花子は父親の無事を喜んだ。

（杉岡　1992, 366）

筆者の観察によると，対象も誘因もどちらも EO 心理動詞構文の主語となりうるが，その受身文を作って，再び経験者を主語とした場合，すなわち，ES 心理動詞の使役受身構文（EO 心理動詞構文の受身文）とした場合，誘因の文よりも，対象の文のほうが許容度が落ちるようである。

(39) a. 花子はその知らせに喜んだ。　　ES 心理動詞
　　b. その知らせが花子を喜ばせた。　　EO 心理動詞構文
　　c.? 花子はその知らせに喜ばせられた / 喜ばされた。　　EO 心理動詞構文の受身文
(40) a. 花子は父親の無事を喜んだ。　　ES 心理動詞
　　b. 父親の無事が花子を喜ばせた。　　EO 心理動詞構文
　　c.??花子は父親の無事に喜ばせられた / 喜ばされた。　　EO 心理動詞構文の受身文

対格構文しかとりえない「恐れる」を例に挙げると，さらにその非文性がはっきりする。

(41) a. 学生達が山田先生を恐れた。　ES 心理動詞
b. 山田先生が学生達を恐れさせた。　EO 心理動詞構文
c. *学生達は山田先生に恐れさせられた。　EO 心理動詞構文の受身文

与格構文しかない「安心する」「困る」の例を見てみる。

(42) a. 太郎がその知らせに安心した。　ES 心理動詞
b. その知らせが太郎を安心させた。　EO 心理動詞構文
c. 太郎がその知らせに安心させられた。　EO 心理動詞構文の受身文
(43) a. 太郎が花子の言動に困った。　ES 心理動詞
b. 花子の言動が太郎を困らせた。　EO 心理動詞構文
c. 太郎は花子の言動に困らせられた / 困らされた。　EO 心理動詞構文の受身文

ここで，２節，３節で問題となった「悩む」について考察する。２節で見たように，「悩む」は，与格構文・対格構文のどちらも取りうるが（44a），対格構文からの受身文が作れない（44b）。３節で見たように，有生主語の項の増える使役構文の補文に入ることができない（44c）。EO 心理動詞構文になりうる（44d）。そして，この節での考察だが，EO 心理動詞の受身文（ES 心理動詞の使役受身構文）になる（44e）。

(44) a. 太郎が成績の悪さを / に　悩んだ。　ES 心理動詞
b. *成績の悪さが太郎に / から　悩まれた。　ES 心理動詞の受身文
c. *花子が太郎に成績の悪さを悩ませた。　有生主語の使役文の補文
d. 成績の悪さが太郎を悩ませた。　EO 心理動詞
e. 太郎は成績の悪さに悩ませられた / 悩まされた。　EO 心理動詞構文の受身文

このことから，「悩む」は，与格補語，対格補語のどちらも取りうるが，その補語は，意味役割的には，「誘因」であり，「感情の対象」ではないのではないか，という予測が生じる。基本的には対格補語が「感情の対象」を，与格補語が「誘因」を表すとしても，３節でも山川（2004）の考察を引いて述べたように，格と意味役割は必ずしも一致しないことを示しているのではないか。

他に，対格構文の「悩む」が受身文とならない理由としては，Carlson（1982）が提唱した Stage/Individual といった対立から説明できるかもしれない。Endo and Zushi（1992）は，対格補語を持つ心理動詞は Stage-Level 述語であり，項構造では Event という外項を持つとしている。この流れで考えると，「悩む」は，対格補語をとり得るが，「喜ぶ」などの一時的な状態（Stage-Level Predicate）と異なり，ある程度恒常的な状態（Individual-Level Predicate）である，ゆえに，外項を持たないと言えるかもしれない。

5．心理動詞の種類

本稿では，心理動詞の受身文を見ていくことで，一見，例外となりそうな，「後悔する」「反省する」「あきらめる」「あきれる」「驚く」「悩む」「迷う」について考察し，「あきらめる」「迷う」は，EO 心理動詞構文とならず，かつ，項が増える有生主語の使役文となることから，心理動詞でありながら，運動動詞に近いものであること，「後悔する」「反省する」は，EO 心理動詞構文とはなっても，項が増える有生主語の使役文となることから，動作主性の高い心理動詞であること，「あきれる」「驚く」は，与格補語が基本であるが，対格補語も不完全ながら取れるということ，「悩む」は，EO 心理動詞構文の受身文（ES 心理動詞の使役受身）にできることから，その補語は，対格であっても，意味的には「誘因」である可能性を挙げた。

心理動詞は，その統語的振る舞いについて考察する際，何をもって心理動詞とするかに明確な基準がない。例えば，Akatsuka（1976）は，日本語の ES 心理動詞は補語に有生名詞をとれないとし，「悲しむ」「喜ぶ」「驚く」「苦しむ」等の例を挙げている。しかし，工藤（1995）が感情動詞として挙げている中には，「がっかりする」「あきれる」「困る」「イライラする」「うんざりする」「はらはらする」「退屈する」「びっくりする」「驚く」のように，補語に有生名詞をとりうる（有生名詞も無生名詞もどちらもとる）ものも存在する。そして，これらの心理動詞は，EO 心理動詞構文となり，有生名詞が主語となる項の増える使役文とはならない。統語的に，有生名詞を補語にとらない「悲しむ」「喜ぶ」と同じように振る舞う。もちろん，EO 心理動詞構文とした際，ES 心理動詞の補語が有生名詞の場合は，EO 心理動詞構文に動作主性が出てきて，Arad（1999）が観察したような事象が日本語でも起こることは事実である[6)]。しかし，これらの動詞が無生名詞を補語にとった場合は，EO 心理動詞構文において動作主性の低い解釈は当然成り立つため，例文を絞ることで，こうした動詞も統語構造の考察に利用できる。

また，杉岡（1992）も工藤（1995）も，心理動詞・感情動詞の例として「憎む」を挙げているが，これは EO 心理動詞構文とならず，項の増える有生主語の使役文の補語となる。

(45) a. 太郎が役人の不正を憎んだ。　　ES 心理動詞
　　b. *役人の不正が太郎を憎ませた。　　EO 心理動詞
　　c. 次郎が太郎に花子を憎ませた。　　有性主語の使役文の補文

このように「憎む」は，「悲しむ」「困る」のような典型的な心理動詞とは異なる振る舞いをする。かといって，運動動詞（外的事象動詞）にも分類できない。心の動きを表す動詞ではあるが，動作主性の高い，運動動詞に近い心理動詞と言えよう。

「心理動詞（感情動詞）」と分類される動詞には，補語に有生名詞を取るか否かだけではなく，補語の省略が可能か否か，といった違いもある。補語に有生名詞を取らない心理動詞は，基本的に，補語の省略が可能である。

（46）a. 太郎がその知らせを / に　喜んだ。
　　b. 太郎が喜んだ。
（47）a. 太郎が経営悪化に　苦しんだ。
　　b. 太郎が苦しんだ。

しかし，補語に有生名詞を取りうる心理動詞には，補語の省略が可能なものと不可能なものがある。

（48）a. 太郎が花子（の言動）に　困っている。
　　b. 太郎が困っている。
（49）a. 太郎が花子（の言動）に　うんざりした。
　　b. 太郎がうんざりした。
（50）a. 太郎が花子（のこと）を　嫌っている。
　　b. *太郎が嫌っている。
（51）a. 太郎が花子（の好意）を / に　感謝した。
　　b. *太郎が感謝した。

心理動詞の特殊な統語的振る舞いとしてよく議論される，EO 心理動詞構文が逆行束縛（backward binding）を許す（Akatsuka 1976），EO 心理動詞構文において，作用域解釈が二義的である（Fujimaki 2000）などといった特徴は，当然のことながら，ES 心理動詞のうち，EO 心理動詞構文が存在するものでなければならない。また，EO 心理動詞構文の主語（ES 心理動詞の補語）が無生名詞に限られる。また，有生主語の使役構文の補文（項の増える使役文）にならない，補語の省略が可能，といった特徴も必要である。

以下に，心理動詞（ES 心理動詞）の種類をまとめる。A と B に該当するものが，意味役割と統語構造の関連の研究でよく用いられる心理動詞である。B の動詞は無生名詞を補語にとる場合に統語研究のデータとして使われることが多い。

＜表１＞　心理動詞（ES 心理動詞）の種類

	＜――強い―― 心理動詞の特徴 ――弱い――＞ 運動動詞に近い							
	A	B	C	D	E	F	G	H
①　有生名詞を補語に	とらない	とりうる	とらない	とりうる	とらない	とりうる	とらない	とりうる
②　補語の省略	可	可	可	可	不可	不可	不可	不可
③　EO 心理動詞構文	可	可	可	可	可	可	不可	不可
④　項の増える使役構文 （可：動作主性高　不可：動作主性低）	不可	不可	可	可	可	可	可	可

［動詞例］
A：喜ぶ，悲しむ，苦しむ，安心する，ほっとする，せいせいする，悩む
B：がっかりする，あきれる，びっくりする，困る，はらはらする
C：後悔する，反省する
D：＜該当なし＞
E：＜該当なし＞
F：嫉妬する，心配する
G：迷う，あきらめる
H：嫌う，憎む，感謝する，恨む，妬む，同情する

6．おわりに

本稿は，日本語の心理動詞の受身文を考察し，対格補語を取りながら受身文とならないもの，与格補語を取りながら受身文となるもの，対格・与格補語を取りながら受身文とならないものという，一見，例外となりそうな例から考えはじめ，意味役割と統語構造を考える上でよく用いられる典型的な心理動詞とはどんなものかについて考察した。統語的に特殊な振る舞いをする日本語の ES 心理動詞は，上記表１のＡのように，有生名詞を補語にとらない動詞，という制約はないが，Ｂの有生名詞を補語にとりうる動詞の場合は，無生名詞を補語にとった場合のみ，Ａのように統語的に特殊な振る舞いをする。その点で，有性名詞を補語に持たない ES 心理動詞のほうが，典型的と言えそうである。また，補語の省略が可能，EO 心理動詞構文となりうる，項が増える有生主語の使役文の補文とならない（動作主性が低い），といった性質を持つ。

本稿では，他に，補語の意味役割には「感情の対象」と「誘因」があり，格表示とは必ずしも一致しない可能性を示した。

心理動詞の統語的振る舞いやアスペクトを考察する際は，本稿に見るように，同じ「心理動詞」といってもこれだけの性質の違いがあるため，「心理動詞ゆえに～である」といった考察はできない。しかし，個々の動詞は，その性質を明らかにした上で，意味役割と格表示や統語構造の関係，アスペクトと意味解釈，統語的振る舞いを考察する際に，有用なデータとなる。今後は，心理動詞の何がどのように統語構造と連動するのかについて，より考察を深めたいと思う。

注

1）Pylkkänen（2000）がフィンランド語において，状態動詞に分類される心理動詞の例を挙げているように，言語によっては，心理動詞に状態動詞のものもある。

2）心理動詞が特殊な統語的振る舞いをすることは，英語，イタリア語，日本語，フィンランド語等，さまざまな言語で観察されている。日本語では Akatsuka（1976），外崎（1995）他に詳しく，イタリア語では Belletti and Rizzi（1988），フィンランド語では Pylkkänen（2000）が多くの例を挙げている。

3）Pesetsky（1995）は，正確には，Target/Subject Matter としているが，両者を分ける必要が本稿の日本語のデータでは考えられないため，Target（感情の対象）のみを記した。

4）「受身文になる」というのは，「感情の対象」や「誘因」が主語となり，「経験者」が目的語に降格する直接受身になりうるということであり，所有受身，間接受身は考慮に入れていない。間接受身は意味関係が調えば，どのような動詞も可能である。所有受身・間接受身に関しては，「誘因」を補語にとる心理動詞について，実例を含め，北村（2008）が考察している。

5）Belletti and Rizzi（1988）は，イタリア語において，EO 心理動詞が，（a）主語の照応接語化（anaphoric cliticization）ができない，（b）ゼロ主語に任意の指示者（arbitorary *pro*）の解釈がない，（c）使役構文に埋め込めない，（d）受身文にできない，という特徴を挙げているが，Arad（1999）は，それらはすべて，非動作主性の解釈の場合のみ成り立ち，動作主性が高い解釈の場合には，そのような振る舞いはしないというデータを示している。

6）EO 心理動詞構文は，（ia）のように主語が無生名詞の場合は逆行束縛を許すが，筆者の観察によると，主語が有生名詞の場合は，（ib）のように，通常の運動動詞の使役文（ic）と同じく，逆行束縛を許さない。EO 心理動詞が逆行束縛を許すのは，元の ES 心理動詞の補語が無生名詞の場合のみである。

（i）a　自分$_1$の成績の悪さが太郎$_1$を困らせた。
　　b * 自分$_2$の母親が太郎$_2$を困らせた。
　　c * 自分$_3$の先生が太郎$_3$を廊下に立たせた。

Akatsuka（1976）は，「花子が太郎を悲しませた」のように，EO 心理動詞構文の主語が有生名詞であっても「花子そのもの」が「太郎が悲しむ」という事象を引き起こしたのではなく，花子の行動，花子に関する何かが太郎を悲しませた，という解釈になるとしている。しかし，（ia）（ib）の許容度の違いからも，EO 心理動詞の主語が有生名詞となれば，どうしても動作主性が生じてしまい，ゆえに，（ib）のように逆行束縛が許されないと言えるのではないか。

参照文献

Akatsuka, Noriko McCawley. 1976. Reflexivization: a transformational approach. In *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, ed. Masayoshi Shibatani, 51–116. New York: Academic Press.

Arad, Maya. 1999. On little v" In *Papers on Morphology and Syntax Cycle One*（*MIT Working Papers in Linguistics* 33）, 1–25. Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.

Belletti, Adriana and Luigi Rizzi. 1988. Psych verbs and theta theory. *Natural Language and Linguistics Theory* 6: 291–352.

Carlson, Gregory. 1982. Generic terms and generic semantics. *Journal of Philosophical Logic* 11: 145–181.

Endo, Yoshio and MihokoZushi. 1993. Stage/Individual-Level Psychological Predicates, In *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*, eds. Heizo Nakajima and Otsu, Yukiko, 17–34. Kaitakusha.

Fujimaki, Kazuma. 1998 A note on causatives and passives with psych-predicates in Japanese: Evidence for movement into a theta-position. 神田外語大学紀要『言語科学研究』4号, pp. 93–107. 神田外語大学

藤巻一真 2000「心理述語文におけるスコープについて」第120回日本言語学会大会予稿集 251–256.

北村よう 2008「感情動詞の受身をめぐって」『東海大学紀要　留学生教育センター』第28号，pp. 123–133.　東海大学

工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房

Pesetsky, David. 1995 *Zero Syntax*. Cambridge, Mass: MIT Press.

Pylkkänen, Liina. 2000. On stativity and causation. In *Events as Grammatical Objects: The Converging Perspectives of Lexical Semantics and Syntax*, ed. Carol Tenny and James Pustejovsky, 417-444. Stanford, Calf.: CSLI.

杉岡洋子 1992「心理述語についての考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第24号 pp. 361-373.

寺村秀夫 1982『日本語のシンタクスと意味１』くろしお出版

外崎淑子 1995『日本語述語の統語構造と語形成―意味役割の表示と状態述語，心理述語，使役構文からの提言―』ひつじ書房

山川太 2004「日本語における心理動詞の格表示について」大阪大学紀要『日本語・日本文化』30号，pp.1-20.

吉永尚 1997「心理動詞の意味規定とその特徴について」『日本語・日本文化研究』第７号，pp.81-98，大阪外国語大学日本語講座